

Ⅱ．解 説

国宝・重要文化財（美術工芸品）の指定

< 絵画の部 >

（有形文化財を重要文化財に指定し、これを国宝に 4 件）

① けんぼんちやくしよくかす が ごんげんげん き え 高階隆兼筆 たかしなたかかねひつ

二十卷

【所有者】国（宮内庁三の丸尚蔵館保管）

【法 量】縦40.0～41.5センチメートル

長767.3～1306.6センチメートル

春日社の神々のれいげんたん靈験譚を集めた絵巻物で、全20巻93段が完存する。発願者である西園寺公衡（1264～1315）による延慶2年（1309）の目録によれば、詞は鷹司基忠（1247～1313）ら4名が分担執筆し、絵は高階隆兼（生没年不詳）が描いた。全段にわたって中世の人々の信仰や生活が活写され、その入念かつ繊細な絵画表現と絵具の発色の美しさは他の追随を許さず、情報量の豊かさでも有数の絵巻物である。鎌倉時代のやまと絵絵巻の最高峰として極めて高く評価される。

（鎌倉時代）



② 紙本著色蒙古襲来絵詞

二巻

【所有者】国（宮内庁三の丸尚蔵館保管）

【法 量】（前巻）縦39.8センチメートル 長2351.8センチメートル
（後巻）縦39.8センチメートル 長2013.4センチメートル

文永11年（1274）と弘安四年（1281）の二度にわたる元寇に参戦した肥後国の御家人・竹崎季長（1246～?）をめぐる顛末を描く絵巻物である。欠失が多く複雑な様相を呈しているが、現状の主要部分については13世紀末には成立していたとみられる。絵は宮廷絵所周辺の優秀なもので、鎌倉時代の軍記絵としては、制作とほぼ同時代の事件に取材する点で独特の位置を占め、一介の御家人から見た事の顛末を記録しようとした点では、稀有の作と言える。モンゴル帝国の拡大によって世界各地で巻き起こった事件のひとつとしての元寇とほぼ同時期における視覚資料としては類例を見ない貴重なものであり、我が国の文化史上、比類ない価値を有する作例として極めて高く評価される。

（鎌倉時代）



③ しほんきんじちやくしよくからじしず 紙本金地著色唐獅子図 かのうえいとく 狩野永徳筆 ろつきよくびようぶ 六曲屏風

一隻

【所有者】 国（宮内庁三の丸尚蔵館保管）

【法 量】 縦 223.6 センチメートル 横 451.8 センチメートル

金雲たなびく山間^{やまあい}を2頭の唐獅子が悠然と歩く様子を力強い筆致と明快な彩色で描く。その豪放な筆致、量感豊かな形態把握から、様式的にも狩野永徳（1543～90）の筆であることは疑いない。その気宇の壮大さと、明るく開放的な作行きは圧巻のひとことに尽き、我が国の絵画史上で突出した存在感を示している。織田信長や豊臣秀吉を飾るにふさわしい絵画様式が形成される中心に位置した狩野永徳の代表作であることはもとより、その時期の文化を代表する優品として極めて高く評価されるものである。

（桃山時代）



④ けんぼんちやくしよくどうしよくさいえ 絹本着色動植綵絵 いとうじゃくちゆう 伊藤若冲筆

三十幅

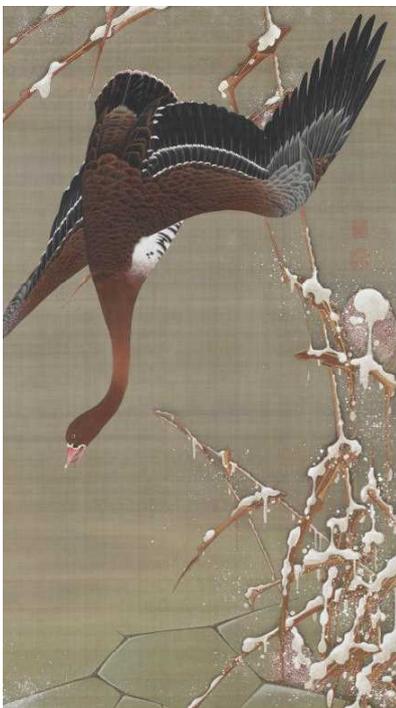
【所有者】国(宮内庁三の丸尚蔵館保管)

【法 量】縦141.8～143.4センチメートル

横78.9～80.1センチメートル

伊藤若冲（1716～1800）が40歳を過ぎたころから10年程度をかけて描き継ぎ、数度にわたって京都・相国寺に寄進した大連作である。若冲の画業の中核に位置するもので、徹底的な観察に基づく実在感と、絵画ならではの意匠性が高い次元で融合し、華麗で緊張感のみなぎる若冲特有の表現世界が提示される。画題や構図、描法を入念に構想することにより、若冲周辺にすでにあった諸要素を巻き込みつつ、若冲独自の表現に高めていることは瞠目され、江戸時代中後期の京都を代表する作例のひとつとして、ひいては我が国の花鳥画の到達点のひとつとして極めて高く評価されるものである。

(江戸時代)



<書跡・典籍の部>

(有形文化財を重要文化財に指定し、これを国宝に 1件)

① 屏風土代 おののみちかぜ 小野道風筆

一巻

ほうえん 保延六年十月廿二日 ふじわらのさだのぶおくがき 藤原定信奥書

【所有者】国（宮内庁三の丸尚蔵館保管）

【法 量】縦24.4センチメートル×全長434.9センチメートル

本紙18紙 奥書1紙

屏風土代は、大江朝綱おおえのあさつな（886～958）が作った漢詩を小野道風（894～966）が屏風に貼る色紙形しきしがたに清書するために試し書きした土代（下書き）である。道風は、和様の書の祖として、また、三蹟さんせきの第一として極めて著名である。本書には、律詩8首と絶句3首ぎょうそうたいが行草体で書かれている。温和で豊潤な中にも力強さを感じる書風であり、道風の真跡として尊重されてきた。三蹟の一人藤原行成ふじわらのゆきなりを始祖とする書の流派である世尊寺流の第5世藤原定信（1088～?）による「屏風土代」識語（「奥書」）には、「屏風土代」は延長6年（928）に内裏の屏風のために、朝綱と道風によって制作されたことが記されており、『日本紀略』にある記事とも一致している。本書は、小野道風の真跡のうちでも最も確実なものとして評価が高いだけでなく、歴史的背景が押さえられる点において、我が国の書道史上の代表作といえるものであり、文化史上にも極めて貴重である。

（平安時代）

